
候補生たち

杉林機構

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

候補生たち

【Nコード】

N9305Y

【作者名】

杉林機構

【あらすじ】

ある夏の日、府本里美は神社で倒れ、目が覚めるといわく有り気な学院への入学を勧められるのであった。

1 わたしが、良い子じゃないって。

神社自体にはなんの興味もなくて。

だから名前も知らないし、なんの神様かも知らないし、ちゃんとお参りしたこともない。

けれど、たぶん気にはなっていて。

うまく説明できないけど、古い大きな木がたくさんあって、いつも暗くて、いつも人の気配がなくて、いつもひんやりしていて、なんかとくべつな場所って感じがした。友だちとケンカしたとき、親に叱られたくないとき、色々悩んだり落ち込んだりしたときつまり、ひとりになりたいとき、つい行ってしまふ場所だった。

お賽銭箱の裏側に座って、向こう側にはきつと神様がいるはずの扉にかかった重たそうな錠前をぼんやり見つめていると、ふしぎと力が湧いてくるような、そんな気がして。

わたしの場所っていうか、パワースポット？　みたいな。

でも、あの日はちよつと違っていて。

友だちとプールに行く約束があつて家を出たのに、気づいたら神社にいた。セミの鳴き声に囲まれて、じつとりと汗をかいて、下に着ていた水着が変に張り付いていて、暑いのになんだか寒いような、いつもとちがって気持ち悪い感じ。

「あー、あー、あーあー……」

わたしはバカみたいに口をあけて、声を出していた。

そうしていないと息苦しかったから。

遅れるからメールしようとか、はやく泳いでさっぱりしようとか、そろそろ宿題を片付けようとか、帰りにアイス食べようとか、色んなこととか、からまりながら頭の中をぐるぐる洗濯機みたいに回っていて、けど、なにひとつ考えてもなくて、どこかおかしかった。そして足は勝手に動いていた。

「……あー、あーあー、あー、あー、あーあー」

神様の集金箱をいつものように無視して、その奥の扉にかけられた錠前に触れる。なんとなく、けれど、たしかに開く予感があった。実際、鍵もなにもなくカチリと動いて、血みたいな鉄の匂いが鼻を刺す。中に入ろうなんて思ったこと、一度だってなかったのに。わたしはガチャガチャ外した錠を投げ捨て、力いっぱい扉を開いていた。

冷たくて、かび臭い空気があふれ出て。

「こんにちは」

不意に、背後から声をかけられて。

「あつ」

わたしは吐き出しかけていた声と一緒に息を飲み込んだ。

悪いこと、してる。そう思ったら背中からどつと汗が出てきて、それがすぐに冷えて、身体がひやっと震えて、動けなかった。一度、本屋さんで万引きした中学生が呼び止められるのを見たことあって、逃げられそうなのに、逃げられなくなっちゃう。こんな感じなんだ。捕まるんだ。

「聞こえなかった？ こんにちは」

「……」

どつくとつく。

息苦しくなるような、脈打つ血管の音を耳の奥に感じながら、両親のこと、考えてた。一人娘が捕まったら、どう思うだろうって。けど、あんまり深刻な気持ちにならなかった。逆に、あの仲良しで優しい二人が、どんな風になってしまっていて、ワクワクする。『あんたなんかウチの子じゃない！』とか言われちゃうとかって。こんな日がいつかくるって思ってたのかもしれない。なんか変だけど、わかってた。

わたしが、良い子じゃないって。

どつくとつく。

「どうしたの？ ねえ？」

足音がどんどん近付いてくる。

唾を飲み込んで、わたし、笑いそうになってた。誕生日プレゼントを貰って、嬉しいけど、なんか笑うと感じ悪いかな、とか思っちゃうような、外からどう見えているのか気になっちゃって、くちびるがピクピクするときの、あの気分。わたしの中に、隠したい自分があることをすごく意識する。良い子のフリをしたがってるって。

ほんとうは、良い子じゃないから。

「あなた、ふもと府本さんのさとみ里美ちゃんでしょう？」

⋮

振り向かないで、うなずく。

$\dots \wedge U_i \wedge U_{i+1} \wedge U_{i+2} \wedge \dots$

名前を呼ばれて、わたしの鼓動はリズムカルになる。

悪いことしようと思ったことないけど、良いことしようと思ったこともない。

なんて、この言い方はきつとフェアじゃなくて。

悪いことは思いつくけど、良いことは思いついたこと、ない。

「里美ちゃん？」

ポン、と肩を叩かれて。

そこまで。

わたしがあの日について覚えていることは。

目が覚めたら翌日で。

家の、わたしの部屋の、布団の上で。

変な夢、と当たり前のように納得したのだけど、パジャマのまま居間の襖を開けると、普段はかかっていないエアコンが動いていて、冷たい空気が流れ出てくる。両親と担任の吉田先生と見知らぬ女の人、男女二人ずつ、八つの真剣な目が一斉にわたしを見た。それですぐ夢じゃないとわかった。夏休みの午前六時、ラジオ体操がはじまる時間だった。そんな時間に大人が集まっていることなんて、ふつうに変な夢みたいだったけど。

「里美、着替えて顔を洗ってきなさい」

お父さんが、これまであまり聞いたことのない落ち着いたトーンで言った。

横でお母さんがうなずいて、わたしもうなずいて。

「ぶはっ」

生ぬるい水で顔を洗ったら、それほど悪いことしたっけ？ と冷静になる。たしかに、神社の社殿に勝手に入るのは悪いことだろうけど、学校の先生を呼ぶほどのこと？ 鍵だつて最初から壊れていたのでは？ 中にも入ってないし？ 居間にいた女の人が神社の人？ 次から次へと疑問が湧いてきて、まとまらなくて。

「どうでもいいや」

すぐに考えるのをやめた。

あの一瞬にワクワクしたような感情はもうどこにもなくて、これから面白くもなんともなさそうな現実的お説教が待ってるだけと思つたら、なにもかもバカバカしい。わたし、どうかしてた。夏休みのなにかで浮かれて。くっだらない。

部屋に戻ってケータイを見ると、約束をすっぱかしたらしいことだけ現実。

心配するメールから、だんだん怒っているらしいメールへ。

フォロー、大変だ。けど、ともかく先生を待たせていた。言い訳は後で考えよう。さくつとマジメに叱られればお説教もそんなに長時間にはならないはずだ。こんなに朝早くから来ているのだし、先生も女の人も、そもそも両親だつて今日の予定がある。

「お待たせしました」

できるだけよそ行きの声で、わたしはわざとらしく反省しながら居間に戻る。

廊下で正座をして襖を開ける。テレビで見た旅館の仲居さんがそうするようにおしとやかにそして深々と頭を下げて、バカみただけど、子供なりに真剣にやつてるんだなと先生たちが思ってくれば、笑われてもオッケー。そんな、きつたない計算で。

「その、昨日は、申し訳ありませんでした」

そう言つてゆつくりと頭を上げると、

「あ、れ？」

四人の大人たちは不思議そうな顔でわたしを見ていた。

「なにを謝っているんだ？ 里美」

「……えー、つと、昨日のこと、じゃないの？」

「それなら、謝るんじゃないかって、お礼だろう。昨日、神社で倒れていた里美を家に連れてきてくださったんだ。吉田先生と、こちらの方が」

と言いながら、お父さんは繰り返すように頭を下げる。

「僕は気付かなくて、通りすがりに見つけたのは平島さんですから」担任の先生は慌てて謙遜し、

「そんな、私も偶然ですよ、昔から寺社仏閣に興味があるだけで、ついふらつと覗いただけで、そんなお礼を言われるようなことではありません。里美さんが無事でなによりです」

ひらしまさんと呼ばれた女の人が上品に笑う。

両親や先生よりは若いだろうか、でも、なんだか高そうなスーツを着ている。シャツの生地もやたらなめらかだ。顔とか身体つきはそれほど印象に残る感じじゃないけど、身なりがきちんとしているので賢そうに見える。けれど、なにより、その声は神社でわたしに声をかけたものと同じであるように感じられた。それは間違いなくて。

どつくとつく。

まだ鼓動が大きくなった。

「いーえー、軽い熱中症ですから、里美、ほらきちんとお礼をなさい」

いつのまにかわたしの横に移動してきていたお母さんが、そう言つてわたしに頭を下げさせる。「ありがとうございました」と言わされながら、わたしはしつくりこない。どうして、神社のこと、言わないのか。勝手に鍵を外したことを。

大人がなにかを隠すときは、必ずそうする理由があるから。

「夏、外を出歩く時は帽子ぐらいかぶらないとね？」

「……はい」

わたしは疑ってかかる。

「では、里美さんも来たので、説明をもう一度」

ひらしまさんは食卓の上に広げられていた紙をとんとんと揃えた。

「ほら、里美、座りなさい」

「うん」

お母さんに促されて座布団の上に正座して。

「これ、見てくれる？」

「はい」

ひらしまさんはわたしの前に一冊のパンフレットを置いた。表紙には大きな桜の木と、学校の校舎らしき写真。そしてなんだかオシヤレな制服を着た女の子が、ありがちな嘘くさい笑みを浮かべている。この学校に入れて幸せ、みたいな感じ。

「せいき、の、じょしがくいん……」

わたしは印刷されている文字を口にする。

「いいえ、里美さん。聖木乃女子学院中等部^{ひじり・きの}」

「はあ、そうですか……」

そう言われれば、東京に行く途中に木乃という街がある、ことは知っていて。

「来年から、この学校に通いませんか？」

「え？」

だから？ と聞くよりはやく、見透かされるように言われた。

「わたしが？」

そう呟いて、わたしは両親や先生の顔を見る。お父さんはなにやら難しい顔をしていて、それはお母さんも近いようで、でも先生は強くうなずいていて。

「そう、府本里美さん、あなたに、是非とも」

そして、ひらしまさんはなんだか凄みのある笑顔でわたしを見ていて。

なにかに巻き込まれてる。
整理できないわたしの頭にも、それは強く感じられた。

1 わたしが、良い子じゃないって。
(後書き)

お読みいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9305y/>

候補生たち

2011年11月27日21時51分発行